

消えて行く

ちろちろと微かに蟲が鳴く

いや、気のせいかも知れぬと思ひ直す

ただどこかでちろちろと蟲が鳴く

闇もなく、草叢もない

道が続いていて霧のような切れ切れのカーテンが揺れる

その隙間を縫って歩いて行く僕の耳に

微かな微かな韻律が微細な鈴の音のように忍び込む

旋律に耳を傾けながら

歩き続ける僕の足が次第に短くなつて行く

いや、足が地面に一步ごとにめり込んで行くのだ

地面から下にはもう足の感覚が失せている

つまり僕の身長が地面に解け込んで行くのだ

蟲の声が一段と高まり

その音源は、体の周囲ではなく

体の中から伝わって来るように感じられる

心臓なのか胃袋なのか三半規管なのか

肺蔵であるのか生殖器官であるのか

脳底の片隅であるのか

或いは、血管の中を流れる血液の摩擦音なのか

意識の網の目を走りまぐる思考が演奏する電磁波的な音楽であるのか

僕の存在そのものが、音で描かれた抽象画のように

視界のスクリーンに大写しになり

色を失ってゆく

歩いていると言う

現実感には既に失っている

唇が地面の小さな砂粒に違和感を感じる

感性が地下に埋没すると

地表との違和感も消え

存在も背丈を失いゼロとなる

葬送曲のような蟲の声もやがて鳴りを潜める

昨日と何も変わらぬ風景が広がっているだけだ

(2012.12.11)